死神と少女の幸せ

梨緒（元ブライトハート）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神と少女の幸せ

【Ｎコード】
Ｎ２４０８ＢＡ

【作者名】
梨緒（元ブライトハート）

【あらすじ】
人が死ぬときに死神は現れ、願いを叶えるらしい。
病弱な少女、稔は色のない部屋で死神に会う。
稔は３日の時間を経て何を願ったのか。

〜〜大分前から書いていた物で、妄想の塊でしかありません。
病院とか入院したことないんであんまり分かりません、空想です、妄想です、ということを踏まえて読んで頂けると幸いです。
ちなみに「これこうだしちげーよ」とか「そんなこともしらねーの

か」とか言う駄目だしはいりませんので。
言ってますもん、空想だ、妄想だって。
あ、また、誤字脱字のご指摘と感想とかは大歓迎です。
ここもうちょっとこうしたほうが読みやすいかも、とかいうのも大歓迎です。
よろしくおねがいします。〜〜

（前書き）

連載書かずに短編書いてどーすんだwっていうのは私、梨緒もすごく思ってることなので叩かないでくだしあ

私は昔から病弱だった。
今日までに何回入退院を繰り返してきただろう。
何度も何度も血液検査などの精密検査を受けて、治療をしてもらっているうちに。
いつの間にか、私の体はボロボロになっていた。
そして私ももう自分の命が、そう永くは無いことを感じ取っていた。

最近はずっと病院暮らしで
真っ白な壁に床、色の少ない生活だ。
病室の窓から見える門の傍には桜の木が立っていて、
たくさんの小さな花びらを風にそよがせている。

「はやいなぁ・・・」

もう4月だもんな、
私は一人つぶやいた。
ぼぉっとしていると急にカラリと音を立てて扉が開けられた。
見たことのない青年だ。
薄めの金髪に蒼い瞳。
外国人？そんな疑問を頭に浮かべた時。

「俺は死神だ。」

さらにハテナマークが浮かぶ。
急に言われたって困る。

「ええと、とりあえず座りませんか？」

扉を開けっ放しのままでいる自称死神に言うと、
言動に似合わず静かに扉を閉めて差し出したイスに座った。
自称死神は私を見る。
今にも吸い込まれてしまいそうなブルーの瞳で。

「もう一度言う、俺は死神だ。」
「ええと・・・」

返事に困る。
さっきも聞いたときも驚いたが、改めて聞くと更に。

「・・・驚かないのか？」
「いやまぁ、そりゃあ驚きましたけど・・・」

むしろ、そろそろそういうのが見えてもいいかな、とも思っていたくらいだ。

「まぁいい、俺はお前が死ぬことを伝えにきた。」
「ついに、ですか」
「はっきり言おう、お前は明後日の昼過ぎに死ぬ。」

ああ、すぐ明日とかではないのか。
そう思ったがなかなか良心的だと思った。
両親、学校の友人たちに挨拶する時間ができたと内心少しだけ喜んだ。

「死ぬ前に1つだけ願いを叶えてやる。どんな願いでも叶う。例えば、このまま死なずに生きるというのも大丈夫だ。」

なんだそれは最強じゃないか、という言葉は心に留めておいた。
死なずに生きる・・・良いと思うけれどなぜかピンとこなかった。
私はもう生きることに疲れているのかも知れない。
だって、生きるという言葉を聞いた時、なぜかため息が出そうになったから。

「俺はとりあえずお前の周りにいる、話しかけたかったら話相手になる。」
「ありがとう」

そこでふと思ったが、
なぜ願いを叶えるという良心的なことを死神がやっているんだろう。
死神って・・・？

「ちなみにお前以外には俺の姿が見えないから恥を晒したくなかったら人気のないところで話しかけるんだな。」

思考を中断させられ、もうどうでもいいか、と思うことにした。

「そして早速話しかけるのかお前は。」
「はい」

とりあえず名前を聞いてみた。

「まぁ・・・いいか、死神のアイルだ。」

「アイルさんですね、次からそう呼ばせていただきます。」
いままでどのぐらいの人の死を看取ったか、など話をしていると
私担当の医師が看護婦を連れてやってきた。
いつもの点滴だろう。

「稔さん、体調の方はどうですか？」
「ええ、まぁいつも通りです。あなたも体調にはお気をつけてくだ
さいね、いつどこでどうなるかわかりませんし。」
「ありがとうございます。では点滴が終わったらナースコールを。」
「はい。」

点滴の針を刺す痛みはもう感じない。
慣れてしまった。
時計を見るともうすでに１５時過ぎだった。

「この世界ではおやつの時間か？」
「ふふ、そうね。」

アイルはいろいろ詳しいようで。
そりゃあ、あちこち行っているからなのだろうけど。
私は正直うらやましい。
ほぼ家か病院暮らしなので海外旅行はもちろん国内旅行にさえ行け
ない。
体がもっと頑丈だったらどこに行きたかったのだろうか・・・
考えたらキリがない。
アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア・・・。

「昔だな、イタリアだかに死の宣告をしに行ったときだった。」

懐かしむように話し出す。

「8歳の少女で、お前のような雰囲気を持っていた子だった。素直で・・・。」

その少女はニアといい、笑顔の似合う子で、アイルにも怖がらずに笑って挨拶したという。

アイルは生まれて初めて怖がられなかった。

うれしかった、でもまたすぐ別れが訪れる。

限られた時間をニアになるべく楽しんでもらえるようにした。

最後の時、ニアはアイルにこういった。

『お兄ちゃんとお話できて楽しかったよ、またお話しようね！』と。

苦しいはずなのに、声を絞り出して、満足げな笑みを浮かべて。

そのことを話しているアイルはどこか寂しそうだった。

アイルは、死神とあろうものが少女にそんな感情を抱くことは恥だと、

ニアが息絶えてアイルの上司の人に怒鳴られたといっていた。

私はアイルの手に自分の手をそっと重ねた。

「・・・？」

「大丈夫、その女の子はきっと本当に楽しかったはずよ。私もアイルさんとこうして話せて楽しいもの。」

それからまたちょっと話をして、点滴が終わったので針を抜いてもらい。

日が沈んできたので庭へ出てみることにした。

庭では周りに立つビルの隙間からオレンジ色の光が差し込んでいた。
隙間から少しだけ覗く夕日が私を見つめている。

「・・・ここの夕日も、同じように美しいのだな・・・。」

私はこの夕日を、どこと比べているのか分かった。
ニアのことを話しているときの表情と一緒だったからだ。
ふと、聞いていないことを思い出した。
人が離れているのを確認してから小声で問う。

「アイルさん、質問しても良いでしょうか？」

目を細めていたアイルが私を見た。

「なんだ？」
「ニアちゃんは、あなたに、どんな願い事をしたんでしょうか？」

ちょっと驚いた目をしたが、アイルは答えてくれた。

「・・・『次に生まれ変わる時、またあのお母さんの子供でありたい』、それがニアの願いだった。」
「・・・優しい子ね。私も会ってみたかった。」

寂しそうな目を夕日に向ける二人。
ニアは優しい心の持ち主だった。
・・・私は？
私はどんなことを願いたいのだろう？

まだ答えは出ない。

それから病室に戻った。
食べなれた病院のご飯。
嫌いなものも出てたけど、最後だからと口をつけてみた。
やっぱり嫌いなものは嫌いで、不味かったけれど。

食べたあとはアイルと雑談していた。
でも消灯の時間が来ると、また明日来る、と言って空間に消えた。
残された私は、死神かぁ、と一人呟いてベッドに潜り込む。
すぐに深い眠りに落ちていった。

次の日、起きたのは7時過ぎ。
起きてからご飯を食べていたらアイルが鍵の閉まっていたはずの窓から入ってきた。

「おはよう」
「おはようございます。」

普通の挨拶を交わす。
明日、私はこの世界から消える。
こんなに元気なのに、と思った。

今日のうちに皆に手紙を書く。
病院の一階にある売店で便箋を購入した。
早速戻ってペンを手に取る。

はじめはお母さん、そしてお父さん。その次から友達に向けて書いた。
だんだん書いているうちに寂しくなって。

「大丈夫か？」
「・・・なんか、寂しい、かな」
「・・・そうか。」

すぅっと左の頬を小さな粒が撫でていく。
冷たい、涙。
私はどんな風にアイルの目に映っているのだろう。

明るい病室で影が動く。
頬に伸びる手の影。
ビックリして、きゅう、と目を瞑る。
また二敵三滴、水滴が頬を伝う・・・前に、アイルの手がそれを阻んだ。
太くて温かい誰かの親指が水滴を横に伸ばす。

「泣くな、俺まで悲しくなるだろう。」

優しい声で。
死神がそんなことを言っても良いのだろうか。
それを考えると、ふふ、と口の端から笑い声が漏れた。

「優しいのね、嬉しい」

それでもぽろぽろと零れ落ちる雫。
それは何時しか、まだ何も書いていない便箋にも落ちていて。

黒い円となって跡を残していた。

自分の顔を覆った。
私とアイルしか居ない、色の無い静かな病室の中、声を堪えて泣いた。
それでも、嗚咽は漏れて病室の壁に当たって響いた。

そして私が泣いている間、アイルはずっと背中を撫でていてくれた。

「ありがとう、ございます、・・・ごめんなさい。」
「・・・いや、いいんだ。」

ブルーの瞳を優しそうに細めてアイルは言う。
長い睫が優しさをよりいっそう引き出しているように思える。
いいな、羨ましいな。私もあんな綺麗な目が欲しかった。
そんなことを思う。

泣いて赤くなった顔を洗って、手紙の続きを書いた。
今度は泣かなかった。もう出なかっただけかもしれない。
便箋を封筒に入れて、名前を書いて。紙袋に纏めて入れて、ベッドの影に置いた。
私が死んだら見つけてくれるだろうと。

大きな窓から暖かい日差しが射し込んでいる。
耳を澄ますと何の鳥かは分からないけれど鳴き声が聞こえた。
そして相変わらず空は遠く、青く、ずっと奥まで続いていた。

「アイルさん。」
「ん？」
「人は、死んだらどこへ行くのですか？」

アイルは少し考えるような仕草をしてから答えた。

「それは、俺たちにもわからない。」
「そうなんですか？」
「ああ。でも俺は皆、地球にいると思いたい。」
「地球に？」
「残された人の中で生きていると思うんだ。」

残された人の中で生きている。
それは凄い嬉しいことだと思う。
意識などは無くとも、その人を通じて、見れなかったところなどを見れるのだから。
知ることのできなかったことを知ることができるのだから。

「そうだと、いいですね。」
「・・・ああ・・・。」

もうそのころには私は悲しくなくなっていた。
この命があるのは明日で最後。
優しい人たちといれるのも明日で最後。
そう思っても、もう大丈夫だった。

そして時間はなんの感情も無く過ぎていった。
昼になり、夜になり。
星がちらちらと輝いて。

「もし地球に居れないなら、星になりたいな」

消灯時間もとっくに過ぎた夜中、私はポツリと呟いた。

「星に？」

「そう、星に。」

アゲイルは消灯時間を過ぎても居てくれた。
そんな彼の目が私を不思議そうに見ている。

「星って、綺麗でしょう。ここからずっと遠くにあるのに、今もこうやって輝きが見える。」

私の目は暗闇に慣れ、星がよく見えた。
大きく輝いている星。
小さく輝いている星。
大きさや輝きはばらばらだけど、空一面に広がる星の絨毯。

見ているとほぅっとため息が出た。

「そろそろ、寝たらどうだ？」

もう真夜中だしな、と付け加えるアイル。

「ううん・・・寝ますね」
「あぁ、おやすみ。またな」

またもするりと空間に消えた。
魔法なのかなーとか考えてみる。
そしてベッドに入って目を閉じた。

朝起きて感じたのは、まず吐き気だった。
そしてどこか圧迫されているような。
あぁ、死ぬのか。
ただそう思った。
ちら、と時計をみると１０時少し前。
昼過ぎと言っていたっけ、と記憶を掘り返す。

ベランダをみるとアイルが空を見ていた。
つられて空を見ると昨日に同じく快晴で、深い青に染まっていた。
太陽の日差しは暖かく、ブルーの瞳の持ち主は目を細めていた。

見ている私に気付いたのか、アイルはこちらに向かってきた。

「おはよう、気分はどうだ？」
「ちょっと吐き気がしますね。」
「また暫くしたらもっと辛くなるだろうから、今のうちに願い事を決めておいたほうがいいぞ。どうせ決まってないんだろう？」

図星だった。
なにも決めていない。

「決まったらすぐ言えばいい。」

ぷいとそっぽを向いて近くの椅子にどっかりと座る。
あ、可愛い。とか言ったら怒られるのかな。

願い事、何にしよう。
うんうん唸りながら独り言を言っている私は、端から見たら不審者だと思う。

仕方ないでしょう、思い浮かばないんですから。

時間というものは本当に非情なほどに過ぎるのが早い。
今は１１時半を回ったところだが、ちょっともう苦しい。辛い。
当たり前だがナースコールは押してあり、医師がいろいろ見てくれている。
助からないのは分かっているが。

死神のアイルはどうやってるんだか宙に浮いている。

そして吐き気は治まっているが、今度は強い圧迫感に襲われている。
点滴しているのだがまったく治まる気配が無い。

「先生、このままで、いいですよ」
「はい？」
「私は、もう助からないのです」
「なにをおっしゃるんですか。」
「自分の身体、なのでわかるんです、助からない、って」
「いやいや、大丈夫ですよ。生きようって思ってください。」
「・・・とりあえず、家族を呼んでください、ませんか？」

私の口から出る言葉は途切れ途切れで。

医師が看護士に目配せすると、その看護士は病室からあわてて出て行った。
電話しにいったんだろう。

私の家は病院からすぐのところにある。
ここに来るのには１５分とかからないと思う。

１２時にはあと２０分を切った。

もう身体には感覚がない。
死ぬってこんな感じなんだなぁ、と思う。
そんなに苦しくなかった。
けど怖い。
死というものが怖い。
気を抜いたら今にも気を失いそうだった。

「稔！」

気付かないうちに家族が病室に入っていた。
母が名前を呼んだ。
父が悲しそうな目をしている。

願い事。
そうだ、願い事。

「お母さん、お父さん・・・。今まで、ありがと、う」
「何を言ってるの、稔。今までじゃないわよ。これからもよ？」

泣きそうな顔で言ってくれる。

「・・・ごめんね。」

そして私は。

私が死んで何年経っただろうか。

「アイル？」
「ん？」
「今更だけど思うの。」
「何をだ？」

きょとんとしたそのブルーの瞳に長い睫を飾りにつけた目で私をみる。

「・・・ううん、なんでもない」
「・・・？」

私の願ったことはわからない。
もう覚えてないのだ。
ひとつ分かることは、私も死神になったらしい、それだけだった。

もうひとつ、私はいまアイルと夫婦となっている。
長い時間のうちにそういうことになっていた。
死神にも、とても遅いが老いはあるらしく最近アイルが腰が痛いとか言っていた。
そして2人、子供もいる。
生きていたときなら無理だったことが今できるようになって嬉しい。

母や父、友達などはとっくの昔に死んでしまい、話すことができないのが残念でならないが、
私たちが住んでいるところでも友達ができたので寂しくは無い。
子供もアイルもいるということもある。

「あー、次はニホンだな」
「久しぶりね」

手帳を見ながらアイルが言った。
それには私たちの仕事の予定が書かれている。
仕事は悲しいものが殆どだが、私の知らないことを知れることが多い。
そのためとても充実している。
まぁ人が死ぬのはやっぱり悲しいのだけれど。

今居るのは私たちの家。
この世界では土地やらなにやらは無限にある。
神様がいて、大体の願いは聞いてくれる。

「ママぁ、だっこしてー」
「おねえちゃんだけずるい！ぼくもぉ！」
「ハイハイ、順番ね」

まだ小さな子供たちが私に甘えてくる。
上の子がアンナ、下の子がルイスだ。
ここらへんに住む子供で一番の甘ったれと有名である。

「俺ってなんなんだ？」
「ふふ、アンナ、パパにもだっこしてもらったら？」
「うーん、ママがいい！」

アイルが寂しそうな悲しそうな目をして私を見ていた。
それをみて私は吹き出してしまう。

生きている間は大変だったけど、今私は新しい人生を歩んでいる。
仕事は色々つらいけどとても幸せな生活だ。
あの時私が病弱でよかったと思っている。
じゃなかったらアイルと会えてなかったもの。

「ありがとね」
「ママ？」

伝えられるのなら伝えたい。
私と関わった人皆に『ありがとう』を。

（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘がありましたら下さると幸いです。

連載書かないですみません！
ジャンピング土下座するんで許してください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2408ba/

死神と少女の幸せ

2012年1月6日01時48分発行